

3年生が宝塚市に取材し、記事を書きました

宝塚市の全面的な取材協力と、一部写真提供も受けました。
記事・レイアウトは産経新聞社の協力を得て作成しました。

漫画の神様 思いつむぐ



楽しめられる手塚治虫記念館のエントランスホール

手塚治虫記念館

宝塚市が生んだ偉大な漫画家、手塚治虫さん。私たちは昨年12月、手塚さんの功績をたたえる「宝塚市立手塚治虫記念館」(宝塚市武庫川町)の矢野喬士さん取材した。矢野さんは「手塚治虫先生の思いを、来館者に伝える」ことをもって大切にしています」と話してくれた。(石川大輔、西垣侑、南勲佑)

手塚さんが伝えたいかった「自然への愛」と「生命の尊さ」をテーマに、夢と希望を未来へつないでいくことをコンセプトに設立された手塚治虫記念館。平成6年4月、宝塚市と遺族の協力でオープンした。

もともと手塚治虫さんのファンだった人だけではない。他の漫画家のファンや海外からのファンにも来館してもらおうと、手塚作品以外のマンガ・アニメーションや、ゲームのキャラクターなど、多くの人に手塚治虫漫画のよさや魅力を知ってもらえる建物になっている。手塚さん自身の言葉として、宝塚御殿山の自然豊かな土地で暮らしたことが、思いの根源になっている。

では、矢野さんは記念館への来館者に何を伝えたいのか。質問に対して矢野さんは「たくさん手塚作品を見てほしいし、手塚治虫本人にも興味を持ってもらいたい」と話した。

当然、手塚治虫作品をたづねたり読むことができたり。記念館の2階には、約2千冊にも及ぶ手塚治虫作品を無料で読めるブースがある。

手塚さんの作品は、大人になったときに読むのと、子どものときに読むのでは、感じ方が変化するという。読んでほしい。『ブラック・ジャック』や『火の鳥』、『アドルフに告ぐ』といった作品は、子どもでも読みやすい。

手塚治虫さんは、日本の今の漫画につながるストーリー漫画の「始まり」になった漫画家とされる。それだけでなく、現在まで、ほかの漫画家と違って唯一無二なところがある。ストーリー漫画から少女漫画まで、あらゆるジャンルの作品を生み出したことだ。

並外れたチャレンジャー精神を持ち、勉強熱心、すごい吸収力を持っていたからこそ、できたことだ。手塚さんの生活について、『2時間寝ただけで『寝過ぎた』』と言って飛び起きる。『誰よりも遅くまで仕事を始める』などのエピソードも残っている。

手塚治虫記念館を取材すると、手塚さんが伝えたいかった「戦争の悲惨さ」も知ることが出来る。後世まで大切に伝えていかなければならないことだ。



ありのまま生きられる街

同性パートナー認定導入

私たちは今年1月、宝塚を知ってもらったため、いろいろの歴史、戦跡をめぐり、共同参画課の池澤佳子さんと一緒に作成したデートDの危険性を啓発する動画は、テレビのニュースとして取り上げられた。

また宝塚市は、「ありのままに自分らしく生きられるまち宝塚」を基本方針とし、性的マイノリティの人を支援するため、パートナーシップ宣誓制度を兵庫県内で初めて(全国でも4番目の速さで)導入した自治体だ。

平和啓発については、講演会やバスツアーを行った。市民からの寄附で末広中央公園に「平和の鐘」を造り、毎年8月には、原爆や戦争で亡くなった人を追悼するため、鐘を鳴らして黙祷している。

また、80年近く前に日本に原子爆弾が投下されたが、この時の被爆者への「被爆差別」の深刻さも聞いた。被爆者であるというだけで結婚を拒まれる結婚差別などあらゆる差別を受けている。

日本は、男女差別解消への取り組みについて世界から遅れをとっている、といわれることも多い。宝塚市では、人権や平和について大人から子どもまで多くの人が知ってもらおうと、冊子を作成したり、小学校に相談窓口を周知したりするなどの活動をしている。今回の取材で聞いた宝塚市の取り組みが全国にも広がってほしい。

(石原叶望、西村美穂、藤田彩花)

「救いたい」命つなぐ

火災から市民の命を守るため奮闘しているのは現場で消防活動にあたる消防士だけではない。私たちは、消防本部の消防指令センターを取材した。対応してくれた情報管制課の谷口直輝さんからは「今、目の前で苦しんでいる人に対して全力で活動することが大切だ」と語った。

私たちが取材した消防指令センターは、119番の通報受付と現場への指令を主にしている。通報の際は、「場所が分からなくても、まずは通報してほしい」と谷口さん

は話す。見える複数の目標物を伝えてくれる。エリアを絞り込めるからだ。

高齢者が通報しやすいようにも配慮している。いつ、緊急事態が起こってもいいように、ボタンを押すだけで通報ができるペダントを作り、給付しているという。

現場への指令は、指令室と作戦室が行っている。指令室は、119番通報で聴取した現場状況や、傷病者情報といった詳細内容を画面にメモのようにつけて、それがそのまま画像として出動隊車両へ送

消防本部の役割



また作戦室では、映像や音声からさまざまな情報を受け、被害の規模を把握して、活動方針を検討し、判断している。

災害が起きた現場以外のところでも、たさんの配慮と考えが張り巡らされていた。私たちは、消防本部のすべての方々に守られている、ということを再認識し、日々、感謝の気持ちを忘れずにしなければならぬ。「一人でも多くの人の命を救いたい」という大きな気持ちで活動している。この思いが、人の命をつなぐと感じた。(河野晃大、外間拓充、手塚天音)



千年 咲き誇る これからも

あいあいパーク 「日本三大植木産地」山本地区

「日本三大植木産地」の一つとき、千年の歴史がある山本地区に代表される宝塚市の花き植木産業について、あいあいパーク(宝塚市立宝塚園芸振興センター)の西本健さんとなつている。宝塚市は「花のまち」といわれるが、実は西谷地域のダリアと、宝塚歌劇で歌われるスミレの2つを「市花」とし、アピールに取り組んでいる。

植物を育てることの魅力は何か、西本さんに聞くと「花が咲いたときに感動する。実がなる植物は、味覚も楽しむことができる」と答えてくれた。

西本さんも、佐藤さんも、岡本さんも、特に若い世代の人たちに、植物に興味を持ってもらいたいと考えている。西本さんは「ぜひ植物を育ててみて、花がさいたときの感動味を持ってもらおうと、カルチャーや、実の味覚を体験してほしい」と話している。(石野野香、植田凜、岸本紗良、鈴木咲純、龍見佑菜、田中稜也)



産経新聞の出前授業が、雲雀丘学園中のホームページのブログ「中3学年だより」でも取り上げられました。主な部分を抜粋して掲載します。

新聞を読む・作る

2023/2/24

社会総合では川口先生によるNIEの授業が行われています。一年間のゴールは前からお伝えしている通り「雲雀新聞」をつくることです。他授業と同じく、こちらも佳境に入ってきました。

今日の授業では産経新聞の方から、記事を書くときの注意点として「裏を取る」=情報の真偽をしっかりと確認することの話をしました。最近インターネット上で「フェイクニュース」や「デマ拡散」、またそこからの「炎上」が日々話題になっています。これらは情報の真偽を確かめもせず、拡散、リツイートをすることから起こります。過去にもそういった行為で、「そういうつもりはなかった」のに加害者となってしまう事件がありました。

情報を取るときには「裏を取る」こと。たしかに覚えておきましょう。